

## 第十講 ハトレンク銘とエトルスキの女性

エトルスキ社会の特性：

女性、とりわけ既婚女性の地位高し

エトルスキの歴史的位置：

イタリア半島における都市文明の母体

イタリア南部に入植するギリシア人と対立

最大のギリシア製品の愛好者にして輸入者

ローマ人に対する強い影響（都市制度・政務官の制度・宗教）

ローマ人による意図的な記憶の抹殺

宗教関係の職務に女性が中心的に活躍（201）

### 1. ハトレンク銘とその集団

エトルスキの女性がハトレンクをともなつて現れるのは、ブルチだけ  
(201)

家族名＋個人名＋ハトレンク

Mura Shethra hatrencu

Zimarui Ramtha hatrencu

Prushlnai Ram hatrencu

Zimarui R hatrencu

Vishnei Ramtha h(atrencu)

Murai Ravnthu hatrencu

プルシュルナイ家（1名）、ジマルイ家（2名）、ムライ家（2名）、  
ウィシュネイ家（1名）

大家族的結合

ムライ家－フランソワの家－サティエス家と親族関係

ジマルイ家、ウィシュネイ家、ケイサトゥルイ家はプルシュルナイ家  
と親族関係（202）

ジマルイ家の場合、ジラト銘を持つ男性の被葬者の存在（203）

eca Shuthi tarchas leviai hatr(en)cu sacniv

(この墓は ハトレンク、タルカ=レウエに 捧げる)

...../larthal velush/la hatrencu(u)

(ハトレンク、ラルタル=ウエルシュ)

(ra)mtha papni armes armnes apu...../.....hatrencu sacnish(a)

(ハトレンク、ラムタ=パプニ・・・・・・に捧げる)

.....atrencu at....

(・・・・ハトレンク・・・・)

ブルチのネクロポリスで発見された石棺の銘

ramtha vishnai arnyheal tetnies puia

(ラムタ=ウィシュナイ、アルント=テトニエスの妻)

ウィシュナイと『碑文の墓』のウィシュネイとは親族関係 (203)

容器部の左側に施されている浮き彫り：冥界の有翼の魔人とともに馬車が描かれている (204 頁図2：ヘレニズム期) =マートローナの乗っていたカルペントウム、日傘をさしている二人の人物=ハトレンク官職在任回数が見えない (204)

ウェスタリスは処女性が重んじられたのに対し、夫婦合葬で示されている (204)

ハトレンクがマートローナによる祭儀集団の性格を持つ (204)

ravnthi seitithi atiuu sacnisha atursh

(母、ラウトウ=セイティティとその祖先に捧げる)

atiuu=母

atursh=祖先

ハトレンクにオバ (Matertera) あるいはマートローナ (既婚婦人) の意味がある (205)

親族及び祖先崇拝を示している (205)

ハトレンク=ローマ社会におけるマーテル=マートウータ崇拝における

コレギウムと非常によく似ている (205)

マートローナの二つの側面：

- (1) マートラーリアの儀式を執り行う主体者 (女神官)
- (2) 親族の子供たちの健康と保護を願って祭儀を執り行、子供たちの後見人として親族の了解を得る

ハトレンクもマートローナと同様な社会的了解を示す銘であった (205)

## 2. ハトレンクの活動の背景

(i) ハトレンクの活動の精神的背景：『母性の女神』

二つの『母性の女神』に対する崇拝 (206)

母なる大地が生命を育む力や多産性、生と死の循環を象徴 (206)

1) 女神ラサ：

2) タルナやエタウシュワ：ギリシアのお産の神エイレイテュイアに相当 (206)

3) トゥラン：アフロディティーと同等視

4) ウェア：デーメーテルの属性を受け継ぐ

女性の力＝『母性の女神』 (206)

ニールセンの説：ハトレンクをオバ或いはマートローナの意味にとらえる

崇拝対象がマーテル＝マートゥータ或いはこれに相当するエトルスキの女神 (206-207)

結婚を守護するだけでなく、女性に関わる様々な事柄 (例えば出産) を守護 (207)

ラティウムのサトゥリクムの伝説：プブリウス＝ウェアリウスがマーテル＝マートゥータに奉納←流産の疫病の平癒を願う (207)

ブルチ領内のコーサの碑文：マートローナのコレギウムを統率する長が納めた (207)

マーテル＝マートゥータに対する崇拝は、母性を守護する女神への儀式をともなっていた (207)

マーテル＝マートゥータは『母性の女神』であると同時に『曙の女神』でもある。(207)

『曙の女神』がイタリアにおいて現れるのは紀元前六世紀後半以降のカエレである。(207)

209 頁図 4 (エーオースとケパロス：アルカイック) のエーオースとケパロスの像：男子を抱えたる女神

テサン＝エーオース

208 頁図 3 (キャンチャーノ出土のマーテル＝マートゥータ像の灰壺：ローマ時代)：母親が死せる子を祖国へと連れ戻す物語

イーノー＞レウコテア

恋愛、母親の慈悲の物語としての女性の世界、母性の世界 (208)

「イーノーはカドモスの娘であるという理由から、ギリシアではレウコテア一、我が国(ローマ)ではマートゥータと呼ばれ、女神の扱いを受けている」(キケロ)

紀元前 5 世紀から、こうした『母性の女神』の聖域への奉納品が多く見られる (208)

(ii) エトルスキ女性史におけるハトレンク銘の女性

バッハオーフェン：典型的な母権制社会 (208)

特に、銘文には母方の銘が残っている＞母の社会的ステイタスを受け継いでいる証であると見なされた (209)

ボンファンテの反論：父方の銘を伴っている＞エトルスキの女性の文化が父権的社会に根差しながら色濃く残存していた (209)

前 10～7 世紀：男女共通する土坑墓

性による副葬品の違い：男性：矛先、剣、斧、楯、兜など (209)

灰壺(ブッケロ) 蓋部：男根状の突起物、兜状の装飾

女性：フィブラ、玉、紡錘車、紡錘など (209)

灰壺蓋部(ブッケロ)：小鉢状の形状をしたものが乗っかっている

紡績労働を中心にした村落内部、家庭内における女性労働のあり方を示す (210)

前 7 世紀の『ヴェルッキオの玉座』：村落外での男性の労働の姿と村落内で

の女性の労働が描かれている (210)

紡績作業を中心にした家庭内、村落内の作業が女性の仕事の領分 (210)

前 7 世紀：オリエント化の時代：女性のイメージに大きな変化をもたらす

宝玉類や、食器、調理道具の服装が増える (210)

食事をする習慣の変化：エトルスキの男女は肘をついて寝そべりながら、一緒に食事

家族皆で会食をするという習慣

美しさ、富、社会的地位を人に見せる絶好の機会

ニールセン：「女性は公での政治権力は持っていなかったが、自分が裕福な出自であることを示すことによって、家族の社会的地位を明示するのに貢献していた」

こうした女性の公私の場への積極的な参加は、裏を返せば男性のステータスの高さを主張する姿でもあった

紀元前 5 世紀から：女性は男性の足元で椅子に着席＝女性が自らを意識して

自己主張する場面が表現されるようになる (211)

花嫁の婚礼用具、愛の女神や神話上のカップル、婚礼の身だしなみの場面などのモチーフを使い始める (211)

ハトレンク銘を持ったエトルスキの女性はこの『母性の時代』ともいうべき時代に活動

紀元前 3 世紀以降：エトルスキ独自のマートローナによる祭儀はマーテル＝

マートゥータを崇拝する祭儀などにとって代わられた

軍事的に、政治的にローマと対峙し吸収される段階で、家族の持続、文化的アイデンティティと文明全体の持続の安全をより一層意識するようになる (211)